はーとふるメッセージ2003

特選作品紹介
第　4　回

学年は、いずれも応募時のものです。

作文・中学生の部

初めての中学校生活で・・・

小林美希さん
（東中学校1年）

私は、今年、中学1年になりました。初めの方は、「授業のこと」、「友達のこと」で不安があったけど、だんだん慣れていき、友達もたくさんできました。

「こんな楽しい日が、毎日続いたらいいのになぁ」と思っていた矢先のことです。私が、一番仲がよかった子にさけられていると感じたのは・・。

一日目は、気のせいだと思っていたけど、少しショックだった。ある日、本人に聞いたけど、「別にさけてなんかないよ。」と言ってくれた。私は、できるだけ話しかけに行ったりした。そんな日が何日も続いた。私は思いきって、他の子に相談した。そのとき、少し気が楽になり、元気も出て、がんばろうと思えた。「希望の光」もまだあった。しかし、相談した子もその周りの人たちも、だんだん私をさけていった。このとき、私にとっての「希望の光」が消えた。

私は、日がたつのにつれて、だんだん、"さける"から変わっていくのを感じた。なんせ、私の近くで、堂々と私の悪口を言っているから。私は、「これからもこんな毎日を過ごすのかな」と思ったくらい。

そして、中学の期末テストの日、私は一人でさみしそうに窓にもたれていた子がいたので話しかけた。その子は、とっても優しく、おもしろい子で、期末テストをきっかけに、よく話すようになった。

そして、ある日、私をさけている人から手紙が来た。私は、てっきり「仲直りしよう」という内容の手紙かと思った。しかし、内容は、「前、プリクラとりに行ったとき、アンタにはおごるつもりはなかった。だから、お金返せ！」という内容であった。私は、ものすごくショックを受け、少し泣けてきた。

払おうか払わないでおこうかと迷いながら、家に帰った。そして、今までのこと、手紙のことすべて母に話した。そしてその日、また学校へ行き、担任の先生にも話した。すると、私をさけている人と話し、どういうことなのかを聞いてみると先生は言った。そして本当に先生は、その人たちと話した。私も、その人たちと話し、仲直りすることができた。

そして、私が一番仲がよかった子も。このときは、「私が悪かったので、あやまり、"さける"ことはやめる」と言ってくれた。

私は、こんなことを経験し、今まで人の悪口を平気で言っていた自分が情けなく、はずかしく思う。言われてる側は、ものすごく気分は悪いし、傷つく。もし、自分の友達の悪口を言われていても気分は同じ、最悪。それを知った今は、人の悪口を言うのは、やめた。だって、悪口を言っても何の得もしない。ただ、損するだけだから。

私は、『弱い子を精神的に支えてあげられるような強くて優しい人』になりたいと思い、日々、努力している。

選　評

不安と緊張で始まった学校生活が楽しい日々となったときに友から受けた「敬遠」と「疎外」。予期せぬ状況への戸惑いと先行きの不安の中で母と先生の助けを得て集団の中での自分の姿を認識し、「・・人の悪口を言うのは、やめた。」そして「『強く優しい人』に」と決意し、新たな自己像の確立に向かわれる姿を望ましく思い、その姿勢に今日性を強く感じます。

標語・小学生の部

山田真優（ま ゆ）さん
（城南小学校５年）

やさしさを
いっぱい集めて
よい町に